

5年生 異文化理解 (1/18)

伊賀市役所の多文化共生課から、ペルーから来日された白石さんとブラジルから来日された坂田さんに来校いただき、日本と南米の歴史的なつながりや、ペルーやブラジルの文化や生活来日後、困ったことなどのお話をさせていただきました。お二人は、通訳や翻訳、相談を受けるなどの仕事とともに、今回のように、外国のことについて話に行かれることもあるそうです。

お二人の曾祖母は、1920年代の日本の移民政策で、南米に渡られたそうです。白石さんは高校卒業後、坂田さんはお子さんと一緒に、来日されたそうです。お二人とも言われていたことは、ペルーやブラジルにいた時には、「日本人、日本人」「何でここにいるの？日本に帰れ。」と言われ、来日してからは、「外国人」「ペルーに帰れ。」「ブラジルに帰れ。」と言われ、「いったい自分の国ってどこなんだろうと悲しくなった。」と話されていました。また、ご自身のお子さんも、肌の色のことでひどい言葉を浴びせられ、とてもつらかったとも話されていました。

12月末時点の伊賀市の人口のうち約7%は来日をされた方で、国籍は48か国にのぼるそうです。お二人からは、「伊賀市はどこに行っても外国の方と出会える場所である。だから、お互いのことを知り合う機会を大切にしてほしい。」と話されていました。そして、来日して困ったことは「日本語が難しい。」ということだったようですが、お子さんが発熱した時に診てもらったお医者さんの対応などもお話いただく中で、「私たちも、市役所にやってくる人の国の言葉を話せるわけではない。でも、やさしい日本語で話すと、分かってもらえる。だから、みなさんも、やさしい日本語で話をするようにしてほしい。」と話されていました。

さまざまな差別問題は、「相手のことを正しく知らない」ことによる偏見・決めつけ・噂などの鵜呑みが、そうした意識を生み出している場合が多くあります。子どもたちには、国籍だけに限らず、性や生まれたところなどといったことにもとらわれることなく、互いのことを正しく知り、認め、尊敬し合える、そんな人になってほしいと願っています。

授業後、白石さんが、「私は、国際人って思うようにしている。」って話されたことばには、これまで日本で生活をする中で苦労されてきたことなど、様々な思いが込められているように感じました。



6年生 伊賀学ジュニア検定 (1/15)

「伊賀学検定」は、伊賀の歴史や文化を後世に伝える人材を育成することを目的に、伊賀の歴史や文化に関する問題が出題され、毎年、実施されています。

本校では、毎年、6年生が「伊賀学ジュニア検定」に挑戦をし、伊賀の歴史や文化を学ぶ機会としています。今年は、講師に伊賀学検定の上級コースを合格された向井由子さんをお迎えし、最初に、伊賀の歴史や文化、芸術、文化財、城、忍術など、伊賀に関わる内容をクイズ形式で教えていただきました。伊賀で生まれ育った私も知らないことがたくさんありましたが、子どもたちは、事前に配布されていたテキストで勉強してきていて、すらすらと問題に答えていました。その後、子どもたちは、検定の問題にチャレンジしました。結果は、後日、知らせていただけることになっています。

今回の学習をきっかけとして、子どもたちには、故郷の伊賀のことに興味を持ってほしいとおもっています。

問題 伊賀上野には、芭蕉翁ゆかりの「芭蕉五庵」がありました。それに当てはまらない庵は？

①蓑虫庵 ②東麓庵 ③西麓庵 ④北麓庵

答え ④

問題 伊賀の冠婚葬祭につきものの和菓子は？

答え おしもん

4年生と算数の勉強をして

先週から、4年生と算数の勉強する機会を何時間かもたせてもらいました。今回は、「変わり方調べ」の学習で、結果を「表」にまとめることで、変わり方の「きまり」を見出し、それを式で表すことを学習します。



その時に感心をしたのが、例えば、正三角形を上のように並べた時には、まわりの長さは1ずつ増えるという「きまり」や、表を縦に見て、「1の時は3」、「2の時は4」というように2増えているという「きまり」を見出すだけでなく、その「1」や「2」が図のどこなのかを考えて説明する姿が見られたことです。ちなみに、1ずつ増えているのは、「重なっている部分は数えないから、ここ(太い線)だけ増える。」、2増えていることは、「三角形が4個並んでいるから、最後に横の2本を足せばいい。」といった説明をしていました。

次の時間には、右のように正方形を階段状に積んだときのまわりの長さの「きまり」を考えましたが、その時も、辺を移動させて、「きまり」の秘密を考えていました。

